

7. わが国の育成施設めぐり

日進牧場

日高育成総合施設軽種馬育成調教場（以下「BTC調教場」）も昨年10月で開場10年を向かえることができました。開場以来これまでに利用馬がG競走で15勝挙げており、昨年のジャパンカップ優勝馬のタップダンスシチーもBTC調教場の利用馬です。

そこで、今回はタップダンスシチーの育成者である浦河町の日進牧場（代表：谷川利昭氏）を紹介します。

昭和37年創業の日進牧場は生産牧場としてホクトボーイ（天皇賞・秋）、ミホシンザン（皐月賞、菊花賞）、マサラッキ（高松宮記念）等のG馬を輩出している名門牧場ですが、近年は育成業にも力を注がれ、優秀な馬達が育成場から競馬場へ旅立ち、成果を上げている牧場です。

育成部門は20年程前から4～5頭を生産業のかたわらに始められ、BTC調教場が開場するのに合わせて本格的に始められました。

BTC調教場利用開始当初は、自場の育成場から馬運車輸送で利用する日帰り利用と、BTC調教場内の馬房を利用した滞在利用の併用でしたが、平成9年にBTC調教場の隣接地に共同育成場ができ、ここに拠点を置き徒歩でBTC調教場を利用する方法を主体として、現在は毎日20～30頭程の馬がBTC調教場を利用しています。

育成を本格的に始められた頃は、アイルランドやニュージーランドから日本では考えられない一流のプロのジョッキー達を連れてきて、彼らのノウハウを吸収し、この2～3年は日本人スタッフだけでできるようになり、この時のヨーロッパ方式の導入は非常に参考になったとのこと。

BTC調教場の利用も当初はどうやって使ったらいいかわからなかったそうですが、全ての調教施設を使い、試行錯誤の結果今の形に落ち着いたそうです。

基本的には、直線馬場を利用すること（速くやっても壊れにくい）とし、冬の間は屋内直線馬場（ウッドチップ、1,000m）をフルに活用し、屋内直線馬場でまっすぐ走れるようになったら屋内坂路馬場（バーク ウッドチップ、700m）も利用、そ

の回数も週1回から週2回というように利用回数を増やしていく。屋外の馬場が利用できるようになると、1,600m直線馬場(ダート:図1)と屋内坂路馬場を日替わりに利用し、週1回800mか1,600mトラック馬場(ダート)を使うというパターンで、10年してようやくわかったそうです。この調教パターンにたどり着くまでに、坂路芝馬場での調教を週2回こなして平成13年の宝塚記念を優勝したメイショウドトウなどいますが、力の無い馬にはこたえたそうです。



図1 1600m直線馬場での調教

直線調教(平坦コース)は疲れきって帰ってきた休養馬管理にも適しており、傷んだ腰や肩の筋肉と関節を、乗りながら回復させることができるが、トラック馬場ではこの傷んだ部位を逆に疲労させることもあるので要注意。また、体力の無い馬や力の弱い若馬等にも直線調教は適しており、無理なく仕上げている。と、とにもかくにもBTC調教場での直線調教を絶賛。坂路は緩んだ筋肉を締めていくにはいいが、リハビリには向かないということで、レースに向けての調教には必要とのことでした。

このような調教パターンの確立を目指す最中において、タップダンスシチーは1歳の冬にアメリカから日進牧場に来たのです。3カ月の着地検疫の後、BTC調教場等を使い始めて以来現在まで、BTC調教場と競馬場を定期的に行き来(年間の3分の1はBTC)しています。昨年の有馬記念出走後はまた日進牧場に戻り、BTCで調教を再開している状況です(図2,3)。このように長期間(5年間)BTC

調教場を利用し続け成績を出している馬も珍しく、B T C 調教場の貢献度は大で、タップダンスシチーは「メイド イン B T C 」だと谷川氏は自慢されていました。もともと硬いキャンターをする馬で、精神的に弱く、能力を十分に出し切れていなかったが、B T C 競馬場 B T C 競馬場というように定期的にB T C 調教場を使ったことにより潜在能力を開花させ、精神的な弱さも克服し、ジャパンカップ優勝に結びついていきました。



図2 屋内直線馬場での調教(左がタップダンスシチー号)



図3 タップダンスシチー号

平成14年9月の休養明け初戦の朝日チャレンジカップをレコードタイムで快勝、この時に変わったと感じたそうです。また、この休養中に7月の函館記念に向けてダート直線で速い時計（3F36秒）を出して送り出したが、8着に終わり、育成場での仕上げとしては、早い仕上げは慎重に、いかに調子を上げて送り出してやるかということの大切さを感じたそうで、この時の教訓を生かしたことが昨年の好成績（6戦4勝）に表れています。

昨年6月の宝塚記念3着後、休養に戻って来た時は疲労がきつく、コズミが抜けず十分調教できなかつたそうです。10月の京都大賞典に行く1ヵ月前頃からようやく本来の調子に戻り、屋内坂路馬場で13 - 13の調教を1本やったのみ（目つきが変わってきた）で送り出し、馬運車の配車手違いもあり移動後2週間でレースに出場し2,400mを快勝、移動直後に勝てたということで、育成牧場としてはとても嬉しかったそうです。

このように直線調教（じっくり直線で乗れば、疲労が抜け、馬もリラックスし、柔らかい本来の動きがとれる）で疲れた体を癒し、その馬本来のベスト状態にもっていくことが重要で、そのためには絶好調のサイン（目つきの変化、気合いの出かた、ハミがかり等）を見抜くこと。これがまたジャパンカップでのブッチギリの圧勝につながっていったようです。

今後は、外厩制度による認定厩舎としての育成場の整備も考えていかなければならないでしょうとのこと。このためには、騎乗技術をもうワンランク上げる必要があり、追いきりやゲート練習のできる軽量級の乗役をそろえること。また、速い調教が求められることになるので、リスクも多くなる。これに伴って、故障のメンテナンスを行うその道のプロが必要となる。優秀な獣医師、装蹄師が必要不可欠。BTC調教場の利用に当たっては、直線馬場でのタイム計測、屋内の直線走路の延長化、馬場メンテナンスの改善等の要望も出されていました。

日進牧場の益々のご発展と、更なる活躍馬の出現を期待しております。

（平成16年1月30日 原 恵作 記）